

文学会講演会

11月4日(木) 2時間目(11:10~12:40)

けやきテラス 3階



常味裕司 (つねみゆうじ) 氏

1960年生まれ、東京都出身。日本のみならず、東アジアにおけるウード演奏のパイオニアで、第一人者。スーダンのハムザ・エル＝ディン氏や、アラブ世界を代表するウード奏者であるチュニジアのアリ・スリティ氏といった巨匠たちに学ぶ。現在は、洗足学園音楽大学ワールドミュージックコースでウード講師をつとめる一方で、宇崎竜童氏と活動をともしるなど、各ジャンルへ影響を与え続けている。全国各地での演奏活動のほか、各国大使館での演奏も多い。NHKの新・シルクロードではアラブ音楽の監修を行なっている。

ウードは、中近東から北アフリカのアラブ圏で使用される弦楽器。リュートや琵琶に近い楽器で、半卵形の共鳴胴が特徴的。「ウード」は「薄い木片」という意味です。



立岩潤三 (たていわじゅんぞう) 氏

1966年生まれ、徳島県出身。1981年よりドラムの演奏を始め、その後、中近東からインドの様々な打楽器の演奏を手がける。ダルブッカをスス・パンパニン氏やセルダール・バグティル氏に学んだほか、インドのタブラを吉見征樹氏やプラフーラ・アタリー氏から、イランのトンバクをファルボード・ヤードッラーヒ氏から学ぶ。現在は各国の古典音楽を演奏する一方で、ポップス、ロック、ジャズ、古楽等、幅広いジャンルの演奏活動を国内外で行っている。さらに、作曲、編曲や楽曲提供を行うとともに、後進の指導にもあたっている。

ダルブッカは、中近東で使用される酒杯型の片面太鼓。倍音の豊かな音色とそこから叩き出されるダンスブルなリズムが特徴的。デザインにも大きな魅力がある打楽器です。

東西音の十字路

アラブ音楽にしたしむ

〈弦楽器ウードと打楽器ダルブッカ〉

お問い合わせ：文学部日本文化学科共同研究室(9号館4階 内線3280)